

高鷲町内の神社（2）

奥の宮跡（高鷲村の文化財・高鷲村史にこの神社について次のように書いてあったので、再掲した）

元正天皇の時代、養老年中(717~723)、泰澄大師白山開踏の際、この場所を霊場として宮を建立したと伝えられている。内宮(奥の宮)、外宮(口の宮)、七堂伽藍があり神仏両方の社僧と別当及び神主を置き、社務所があった。氏子は東前谷、鮎走、正ヶ洞、中切、穴洞の五ヶ村の氏神として毎年旧暦の8月18日に例祭を行っており、一時は繁栄を極めた。しかし永禄年間(1558~1569)に社殿を焼失し、明治41年(1908)に堂ヶ洞白山神社(口の宮)に合祀されている。

なお、社塔のあった石垣はぼたん積みと云われ石工が積んだものであるが、当初の石垣は堅固で美的な積み方であったであろう。現在は石垣は崩れて、その面影はない。



奥の宮全景



奥の宮拡大写真



ぼたん積み石垣



崩壊した堂塔石垣

鮎走白山神社(口の宮)

由緒書には次のように書いてある。要約して記す。

養老年間に泰澄大師が、白山の開踏の際、鮎走村の助左衛門という者の家に宿泊し、助左衛門は泰澄大師に帰依したので、泰澄はここに暫く逗留したのを幸いに、ここは白山が間近にある霊地であるから神社を創立し、即ち奥の宮、口の宮、七堂伽藍建立し、白山の三ヶ所の尊像を安置した。助左衛門は当神社の別当となり、但馬と改名して泰澄大師が白山登山の時、鮎走村の北 30 町(3740m)隔てた坂道で大日ヶ岳を拝んだのでこの坂を御幣坂と名付け、またこの坂より白山を拝み、白山に登る。この道案内は助左衛門であった。当神社は鮎立村をはじめ芥見の庄 5 ヶ村の氏神とした。永禄元年(1558)に社殿が焼失し、社領は天正の頃鷲見氏より 30 石余寄付があったが、天正年中(1573~1591)の兵乱で鷲見氏が滅亡して社殿を失う。その後、延宝 7 末年(1680)遠藤氏が米 3 斗 4 升余を社領として寄付があった。正徳元年 5 月になり神殿・拝殿等を再建し、これを口の宮とした。祭神は伊弉諾尊、伊弉冉尊、菊理姫命と奥の宮と同じである。

明治 41 年、奥の宮白山神社を合併した。



鮎走白山神社鳥居



鮎走白山神社神殿(右)と拝殿(左)

切立白山神社

由緒書には鮎走白山神社と同じような文章があるが、切立白山神社の人名もあるので再掲する。

養老年間に泰澄大師が白山の開踏の際、泰澄の弟子の臥行者という者がここに来て、切立村の松次郎という者のお宅にしばらく宿泊したとき字西ノ上という所に到着、その所に神社を創建した。この神社は白山より南の方角にあるので、南宮といった。享保 11 年(1726)丙午年 9 月に切立村総三郎を始めとして氏子の者達が社殿を再建した。

なお、現在の社殿は平成時代に改装した建物である。祭神は伊弉諾尊、伊弉冉尊、菊理姫命と鮎走白山神社と同じである。

また、社叢林は、スギ林の大木が多くあり、その内の 3 本が郡上市指定の天然記念物である。



切立白山神社拝殿と神殿



切立白山神社の天然記念物標柱